

武蔵野

ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ

井の頭恩賜 公園の歴史(前編)

武蔵野市民の憩いの場である

「井の頭恩賜公園」が

この5月に開園100周年を迎えます。
それを記念し、春・夏号の2回にわたり、
その歴史と文化をたどります。



家光が「井之頭」と刻んだとされるコブシの木片
(提供：国立公文書館)

井の頭恩賜公園を象徴するのが、サクラや雑木林に囲まれた水辺の風景。太古の昔から清らかな水が湧き出ていたこの地からは、縄文時代の竪穴式住居跡や、旧石器時代の石器、敷石住居跡も出土し、「井の頭池」が、当時から人々の生活に不可欠な水源となってきたことがうかがえます。例えば、この公園の歴史は「人と水とのつながりの歴史」と言えるかもしれません。

清らかな湧水が 人々の生活を支えてきた

井の頭恩賜公園の中央に位置する井の頭池は、江戸時代の初期、江戸に設けられた日本最古の上水道という説もある「神田上水」(現在の神田川)の水源でした。

徳川家康による開府以来、爆発的に人口が増えた江戸の町は、海岸に近い湿地を埋め立てて町の拡張を進めました。そのため、井戸を掘っても塩分濃度の高い水が出るなどして、当初から飲み水の確保に悩まされていたのです。

そこで、家臣の太久保藤五郎が目白台下の川から神田方面に水を引き「小石川上水」を造りました。し

かし、急激な発展を続ける江戸の水需要には応じきれず、当時「神田山」と呼ばれていた駿河台の丘を崩し、「平川」を利用して拡張されたのが「神田上水」です。神田上水は善福寺川、妙正寺川と合流しながら東へ流れ、現在の文京区水道橋付近で日本橋川と分流し、隅田川に合流するまで約25キロメートルの川です。以来、井の頭池に端を発した神田上水は、生活用水としてのほか、米や野菜などを江戸へ運ぶ水運路としての役割も果たし、明治34(1901)年に近代水道設備ができるまで人々の生活を支えました。

井の頭池の水面に、いまでも朱塗りの姿を映すのは「井の頭弁財天」です。弁天堂の持ち寺である天台宗大盛寺の記録文書『神田御上水源井之頭弁財天略縁起』(略縁起)によれば、井の頭弁財天は、天慶年間に関東源氏の祖・源経基が、伝教大師の作という弁財天女像をこの地に安置したのが始まりとされています。

この『略縁起』には、「井の頭」の名の由来も記されています。現代の「三鷹」という地名にも残るように、この一帯は、徳川歴代将軍が鷹狩りを楽しんだ鷹場でしたが、寛永6

(1629)年に三代將軍家光が訪れた際、「この池の水は江戸の飲料水の源・上水の頭であることから「井之頭」と名づけるべき」と仰せになり、傍らのコブシの木に小刀で「井之頭」と刻んだと伝えられています。その後コブシの木は焼失してしまい、現在では石碑が建てられています。また、寛永8(1631)年、夏の干ばつの際に、7日間、7カ所の水加持をさせたところ、顕著な御利益があったと伝えられています。その恩徳に報いるため、家光は寛永13(1636)年に宮社を再建し、境内に桜の木を植えたということです。

弁財天の起源はヒンズー教の「水の女神」サラスヴァティ。農耕の民にとって干ばつは死活問題であったことから、弁財天での雨乞いは、たいへん重要な行事でした。人々は池のほとりで雨乞いをした後、池の水をくんで帰り、地域の氏神様の前でその水をかぶって降雨を祈ったとも伝えられています。地元の農民はもとより、遠くは大崎、五反田方面からも、この井の頭に雨乞いに訪れる風習は、大正ごろまで続きました。



昭和9 (1934) 年の「中之島小動物園」開園式
(提供：公益財団法人東京都公園協会)



大正10 (1921) 年ごろ、多くの人々に賑わう「天然池プール」
(提供：三鷹市教育委員会)

井の頭恩賜公園が開園 やがて都市型公園に

幕府直轄地であったこの土地は、明治維新後に東京府が買い上げ、明治22(1889)年に宮内省(現在の宮内庁)御用林となり、その後大正2(1913)年に東京市に下賜されました。

浅草や上野に東京で初めての「公園」が整備されたのは明治6(1873)年のこと。以来、江戸時代にはなかった「公園」が次第に増えていきます。井の頭公園の計画案が東京市会に提出されたのは明治43

(1910)年のことでした。計画案を作成した井下清(後の東京都公園課長)が後年、「井の頭は奥多摩よりも遠いと思っている人が多かった」と語っているように、まだ知名度の低い場所でした。そして計画案提出から7年後の大正6(1917)年、ついに井の頭に公園が開園します。「井の頭恩賜公園」100年の歴史は、ここから始まりました。

開園から4年後の大正10(1921)年には、井の頭池の東端の水門近くに「天然池プール」が開設されました。飛び込み台や更衣場、児

童用の渡渉池(丸池)も整備されたこのプールは、東京市営プールの第1号。まだプールが珍しかったこともあり、このプールは夏の一大人気スポットになったそうです。この天然池プールは昭和8(1933)年に廃止され、同年、弁天堂のそばに25メートルのコンクリート製プールが開設されました。地下からくみ上げた水が使われていたため、水が冷たいことで有名だったといえます。この25メートルプールは、50年間の長きにわたって市民に親しまれましたが、昭和58(1983)年に廃止されました。

昭和に入り、周辺の宅地化が少しずつ進む中、昭和8年に帝都電鉄(現在の京王電鉄)井の頭線が渋谷駅から井の頭公園駅まで開通しました。翌年には吉祥寺までの全線が開通。郊外の都市化がさらに進むこととなりました。交通手段の発達と並行して、公園にはボート場やプールが整備され、昭和9(1934)年には、井の頭池の中之島に「中之島小動物園」が開園します。その後も、淡水生物専門の水族館「井の頭水生博物館」などが相次いで開設され、井の頭恩賜公園には、楽しみや見どころが充実していきました。

5月1日から7日は100周年記念ウィーク

井の頭恩賜公園では5月1日(月)から7日(日)まで、記念のイベントが行われます。

◎5月3日(水・祝)は「武蔵野市の日」

マルシェや朝市などのお店、コンサート、トークイベントなど。同時期に吉祥寺ウェルカムキャンペーン、トレジャーハンティングも開催。

会場 西園競技場

*詳細は市報4月15日号、ホームページなどでご確認ください。

ろが充実していきました。明治のころ、水源涵養のために植樹された杉林が青々と茂る公園は、夏場に涼を求める人々ににぎわいました。園内にある茶店では、池の水で炊いたごはんと味噌汁、おしんこの「朝食セット」のほか、みつ豆、くずもち、夏にはかき氷とゆであずき、秋にはゆであずきなどが人気を集めたそうです。

江戸の水源地から都市型公園へと変容を続ける井の頭恩賜公園。しかし、その背後からは、戦争の影が、ひたひたと音を立てて近づいていたのです。(後編に続く)